

平安京左京五条三坊一町

—四条西洞院の調査—

2008年

古代文化調査会

例 言

1. 本書は、古代文化調査会が京都市下京区西洞院東入新釜座町において、ペトリュス・プロパティ合同会社によるホテル建設に伴い実施した平安京左京五条三坊一町跡の発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査は、ペトリュス・プロパティ合同会社より委託を受けた古代文化調査会の家崎孝治が担当した。
3. 調査にあたっては、京都市文化市民局文化財保護課の指導を受けた。
4. 本書の編集は水谷明子がおこなった。
5. 図面及び遺物整理は、板谷桃代、井上靖大、上垣雅子、阪倉隆平、須貝淑恵、水谷、山田学が分担し、遺物の実測は板谷、上垣、須貝、水谷がおこない、製図は水谷が担当した。
6. 本書の執筆分担は次の通りである。
I・II 水谷 III～V 家崎
7. 本書で使用した方位及び座標の数値は世界測地系（新測地系）平面直角座標系VIによる。記載した数値はm単位で、水準はT. P.（東京湾平均海面高度）である。
8. 本書で使用した地図は、京都市都市計画局発行の2500分の1の地図（壬生・三条大橋）を調整し、使用した。
9. 土壌の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
10. 遺物番号は実測図・写真ともに共通している。
11. 発掘調査及び遺物整理に際して、下記の方々の御指導・御協力を得ることができた。記して感謝の意を表します。（所属・敬称略、五十音順）

家原圭太 宇野隆志 馬瀬智光 梶川敏夫 上村憲章 北崎仁志 北田栄造 小菊 務
須貝 信 玉村登志夫 長谷川行孝 堀 大輔 三木茂弘 宮原健吾 吉田公茂
(株)明輝建設 (株)大高建設 (財)京都市埋蔵文化財研究所 (株)東洋設計事務所
(株)ファンドクリエーション ペトリュス・プロパティ合同会社

本文目次

平安京左京五条三坊一町

I 調査の経緯	1
II 調査の経過	1
III 遺構	3
IV 遺物	8
V 小結	14

図版目次

図版1	遺跡	第1・2面遺構実測図
図版2	遺跡	第3・4面遺構実測図
図版3	遺跡	1 調査地遠景（北西から） 2 第1面全景（北西から）
図版4	遺跡	1 第2面東半部全景（北西から） 2 第2面西半部全景（北西から）
図版5	遺跡	1 第3面東半部全景（北西から） 2 第3面西半部全景（北西から）
図版6	遺跡	1 第4面西半部全景（北西から） 2 第4面東半南部（南東から）
図版7	遺跡	1 庭園遺構116（西から） 2 第1面北東部柱穴群（北から） 3 土壙89土器出土状況（西から） 4 柱穴191（北から） 5 柱穴257（西から） 6 柱穴297（南から） 7 石室227（南から）

		8 柱穴348 (南から)
図版 8	遺跡	1 土壙279 (北東から)
		2 土壙279断ち割り断面 (西から)
		3 土壙279完掘状況 (東から)
		4 柱穴333・334・335 (南から)
		5 柱穴392・393 (南から)
		6 柱穴370 (南から)
		7 石室380 (北西から)
		8 井戸255 (西から)
図版 9	遺物	井戸235・井戸255・溝190出土遺物
図版10	遺物	溝190・土壙279・土壙89・井戸255・柱穴297・石室380出土遺物

挿 図 目 次

図 1	調査地位置図	1
図 2	平安京条坊と調査地位置図	2
図 3	四行八門と調査位置関係図	2
図 4	北壁・東壁断面実測図	4
図 5	土壙89・279、石室380、井戸255、柱穴257、塀01実測図	6
図 6	井戸235、井戸59、井戸255出土遺物実測図	9
図 7	溝190出土遺物実測図	10
図 8	土壙279出土遺物実測図	10
図 9	土壙89、石室380出土遺物実測図	12
図10	井戸255出土瓦実測図	12
図11	軒瓦拓影・実測図	12

MEMORANDUM

TO : [Illegible]

FROM : [Illegible]

SUBJECT: [Illegible]

[Illegible text follows]

MEMORANDUM

TO : [Illegible]

FROM : [Illegible]

SUBJECT: [Illegible]

[Illegible text follows]

平安京左京五条三坊一町

I 調査の経緯

調査地は、京都市下京区四条通西洞院東入郭巨山町と綾小路通西洞院東入新釜座町にまたがり、実際の調査区は新釜座町内に位置する。当該地は周知の遺跡・平安京跡の左京五条三坊一町にあたり四条通りに北面するところである。また、弥生時代から古墳時代の集落遺跡・烏丸綾小路遺跡に含まれるところでもある。2007年秋、当地にペトリュス・プロパティ合同会社によってホテル建設の計画がなされた。工事に先立ち京都市文化市民局文化財保護課によって試掘調査が実施された。調査の結果、地表下0.5mにおいて中世の遺構が良好な状態で遺存することが判明し、発掘調査の必要性が考慮されるに至った。京都市の指導のもと施主との三者協議の結果、当調査会が2008年1月15日より発掘調査をおこなうこととなった。

II 調査の経過

平安京左京五条三坊一町に当たるこの地は、北が四条大路に、西が西洞院大路、東が町尻小路、南が綾小路に囲まれたところで、四条大路に北面する一町の中央部に位置する。

当地は、平安時代においては関白藤原頼忠の邸宅が置かれたところで、円融天皇中宮遵子（頼忠の娘）の御所、後冷泉天皇の里内裏などになった四条宮が所在したとされる。後冷泉天皇の崩

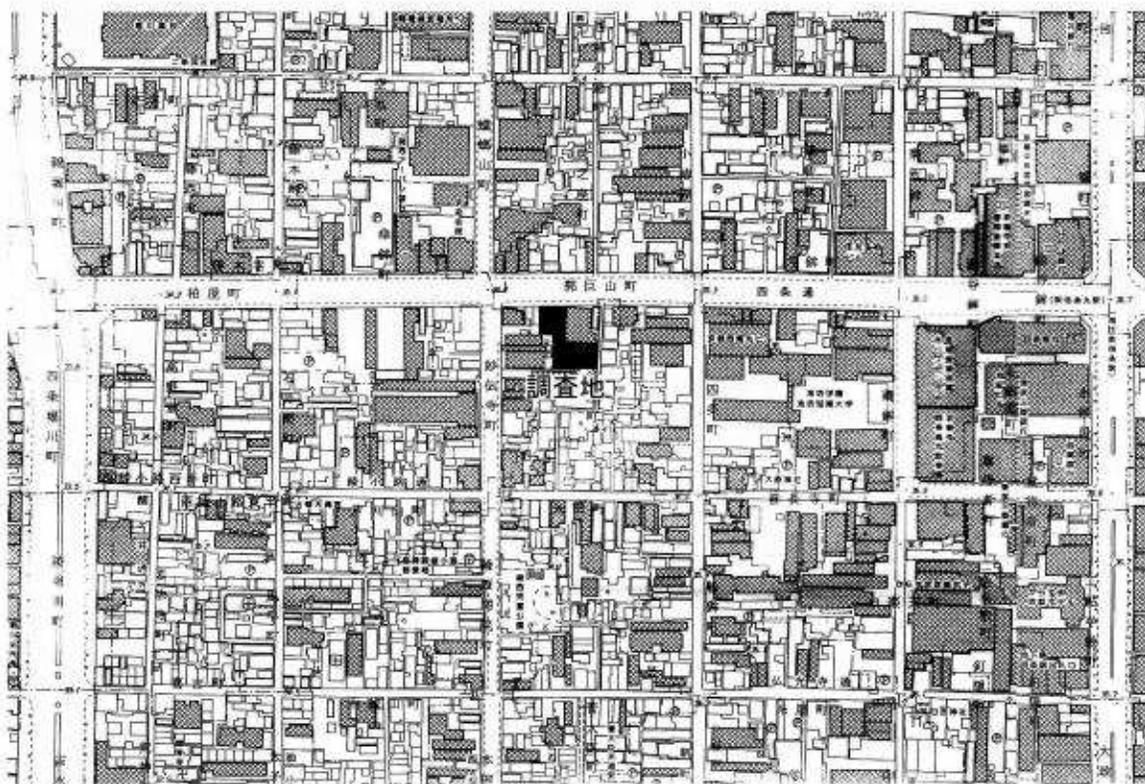


図1 調査地位置図 (1/5,000)

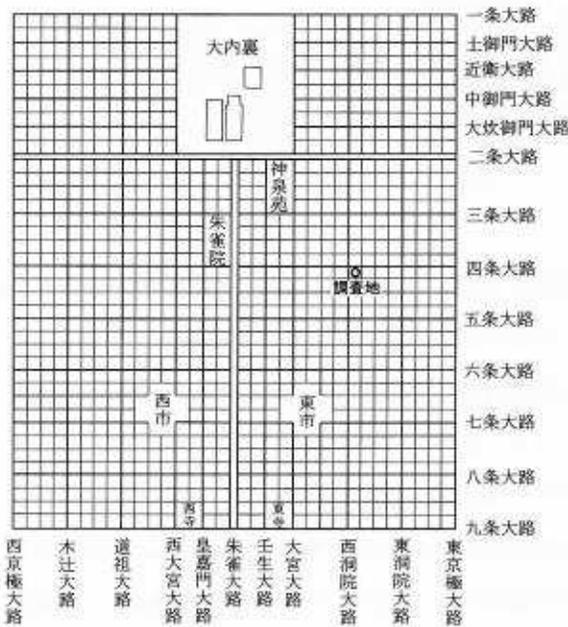


図2 平安京条坊と調査地位置図

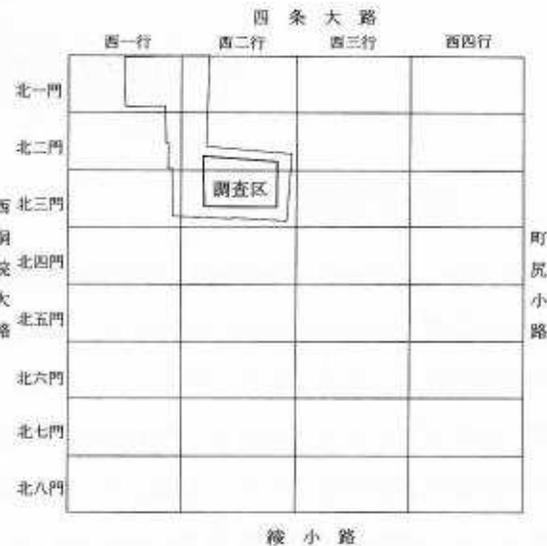


図3 四行八門と調査位置関係図 (1/2,000)

御後は、その皇后である藤原寛子の御所ともなっていることが文献史料(『拾芥抄』『百練抄』)(註1)などから知ることができる。

調査にあたっては、試掘の調査結果により遺構検出深度が0.5m前後と浅く調査に伴う土砂の量が場内処理でおこなえると判断し、機械掘削による表土を含めすべて土砂は場内仮置きとして処理をおこなったが、実際の調査においては、江戸時代以降の井戸が18基を数え、また中世の土取穴が多数検出された結果、想定以上の土砂量となり、第1面の調査以降は調査区を東半部と西半部の2分割にしてそれぞれ調査をおこなった。

調査は平成20年1月15日から平成20年3月11日までの間、実働45日を要した。調査面積は231㎡であったが、遺構面は4面あり、実際の調査面積は延べ920㎡となった。また、3月4日に町内会の要望のもと現地説明会を実施した。

なお、調査の方法としては、(財)京都市埋蔵文化財研究所が作成した平面直角座標系VIによる平安京の復原モデル60(註2)を使用し、4mメッシュのグリッドを設定し、遺構遺物の記録をとる方法をおこなった。一町の築地四隅の座標値(新測地系)は以下の通りである。

北西	X = -110,511.10m	北東	X = -110,510.61m
	Y = -22,335.89m		Y = -22,216.57m
南西	X = -110,630.48m	南東	X = -110,630.00m
	Y = -22,335.46m		Y = -22,216.08m

Ⅲ 遺 構

基本層序は、地表下0.5mまで近世以降の土層が堆積し、その下で室町時代の遺構が現出する。中世の遺物包含層は0.3m程あるが、整地層と見られる土層は部分的に存在するものの多くは遺構の切り合い関係で存在する。地表下0.8m以下黄褐色砂泥層のベースとなる。この黄褐色砂泥層（いわゆる聚楽土）は1m以上の厚さで存在し、土取の対象となっている。調査区西南隅部でベース直上に平安時代中期の遺物を包含する整地層が部分的に残存する。

遺構の大半は室町時代から江戸時代のもので、特に江戸時代の井戸18基、室町から桃山時代の井戸3基、加えて現代井戸1基の合わせて22基の井戸を検出した。また室町時代の土取穴跡を多数検出した。その結果、平安時代の遺構のほとんどがそれらの土取穴によって破壊を受けていることが判明した。平安時代の遺構は、平安時代後期の小さな掘立柱跡及び土壇を数基検出したのみである。遺構総数は447基である。ここでは第1面から第4面まで検出した遺構について、各面ごとに主要なものについてその概要を述べる。

第1面（図版1・3の2）

第1面は江戸時代以降の土層を機械力により除去したのち、最初に着手し精査した遺構面である。遺構の年代は室町時代から江戸時代及び近現代のものがある。

井戸3・13・15・16・17・28・31・35・112・129（図版1・3の2）

いずれも江戸時代の井戸である。それらの内、井戸16・31・112は石組井戸、井戸17・28・35は漆喰井戸である。井戸16・112は江戸時代前期に属する。井戸5は近代の漆喰井戸である。

井戸59（図版1・3の2）

調査区の東部に位置する。江戸時代末期の井戸31に切られる。掘形の径1.8mを測り、深さは2.3m以上である。石組は抜き取られたとみられ、その影響で掘形の上部がオーバーハングした状況を呈したため安全上完掘はできなかった。

掘立柱群（図版1・3の2・7の2）

調査区の東部において根石をもつ掘立柱跡を20基近く検出した。建物は後世の削平により全形を知ることはできなかった。室町時代末から江戸時代前期のものとみられる。

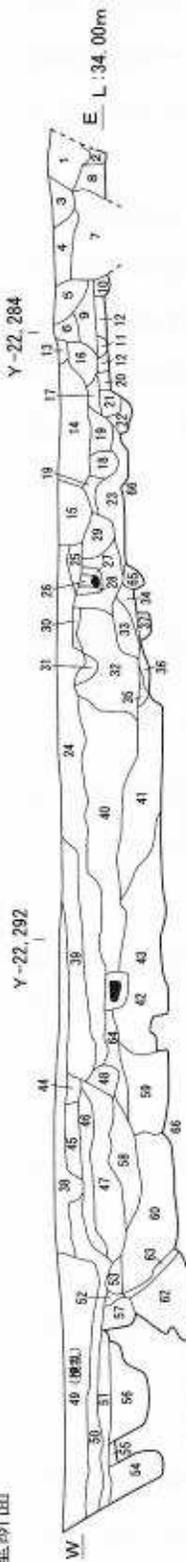
土壇89（図5・図版1・3の2・7の3）

調査区の西南隅部に位置する。トレンチの南壁に接する。径1m程の掘形をもち、深さ0.2mを測る。掘形内より完形の土師器皿が多数出土した。

庭園遺構116（図版1・3の2・7の1）

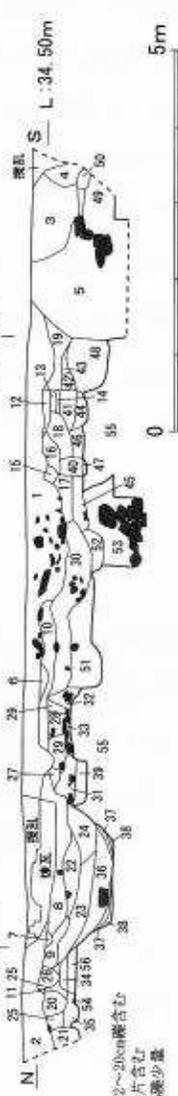
調査区中央西端部に位置する。池は調査区の西壁を越えて広がり、全形は不明である。土壇37と切り合い関係にあり、北側の汀の一部が削られている。確認できた池の規模は南北長3.5m、東西長1.5m、深さ1m程である。池の底部には厚く炭層が堆積し、池が埋められたのちに上部に径0.55m程の円形の景石を置いて造りかえがおこなわれている。炭層より志野茶碗片などが出

北壁断面



- 1 西壁断面図2に同じ
 2 西壁断面図21に同じ
 3 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、瓦片、炭、焼土少量
 4 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、漆喰片、炭少量
 5 10Y83/4暗褐色砂泥、土師器片少量、炭、焼土少量
 6 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥、炭、土師器片少量
 7 10Y83/3暗褐色砂泥、φ1~20cm大礫多量、炭少量
 8 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、土師器片少量、炭、焼土少量
 9 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、土師器片少量、炭、焼土少量
 10 10Y83/4暗褐色砂泥、土師器片少量
 11 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、土師器片少量
 12 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥、土師器片少量
 13 10Y83/3暗褐色砂泥、炭、焼土少量
 14 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥、φ2~20cm大礫、瓦多量、炭、焼土中量
 15 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、φ10cm大礫中量、炭、焼土中量
 16 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥、炭、焼土少量
 17 2.5Y5/4黄褐色砂泥、土師器片少量
 18 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、φ5~10cm大礫少量、土師器片少量
 19 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、炭、焼土少量
 20 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥、炭、焼土中量
 21 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥、φ2~4cm大礫中量
 22 10Y83/3暗褐色砂泥、φ2~4cm大礫中量
- 23 10Y83/4暗褐色砂泥、土師器片少量
 24 10Y84/3にふい黄褐色砂泥、炭、焼土中量、炭少量
 25 10Y84/3にふい黄褐色砂泥、炭、焼土少量
 26 10Y84/4褐色砂泥、炭、焼土少量、炭含有
 27 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥、炭、土師器片少量
 28 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、炭、土師器片少量
 29 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、土師器片少量、φ4cm大礫多量
 30 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、炭少量
 31 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥
 32 10Y83/3暗褐色砂泥、炭、土師器片少量、φ10cm大礫中量
 33 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、炭、土師器片少量
 34 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、炭、土師器片少量
 35 2.5Y5/4黄褐色砂泥、炭、焼土少量
 36 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、炭、土師器片少量
 37 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、炭、焼土中量
 38 10Y83/3暗褐色砂泥、炭、焼土少量、漆喰片含有
 39 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、炭、土師器片少量
 40 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、炭、土師器片少量
 41 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥、土師器片少量、φ10~15cm大礫中量
 42 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、土師器片少量、炭少量
 43 10Y83/3暗褐色砂泥、炭、土師器片少量
 44 10Y83/3暗褐色砂泥、炭、焼土少量
- 45 10Y83/2黒褐色砂泥、土師器片、炭少量
 46 7.5Y83/3暗褐色砂泥、土師器片、炭、焼土少量
 47 7.5Y83/2暗褐色砂泥、土師器片、炭、焼土少量
 48 10Y83/3暗褐色砂泥、炭、焼土少量
 49 10Y83/3暗褐色砂泥、炭多量、漆喰片含有、φ10cm大礫中量
 50 10Y84/3にふい黄褐色砂泥、炭、土師器片少量
 51 10Y84/4褐色砂泥、炭、土師器片少量
 52 10Y84/3にふい黄褐色砂泥、土師器片少量
 53 10Y83/3暗褐色砂泥、炭、土師器片少量
 54 10Y83/3暗褐色砂泥、φ10~15cm大礫多量、炭中量
 55 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、炭、土師器片少量
 56 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、炭中量、土師器片少量
 57 10Y85/4にふい黄褐色砂泥、炭、焼土少量
 58 10Y83/3暗褐色砂泥、炭、土師器片少量
 59 10Y83/2暗褐色砂泥、炭、土師器片少量
 60 10Y82/2黒褐色砂泥、炭、土師器片少量
 61 10Y84/4褐色砂泥、土師器片少量
 62 10Y83/3暗褐色砂泥、炭、土師器片少量
 63 10Y85/4にふい黄褐色砂泥(砂っぽい)
 64 7.5Y83/2暗褐色砂泥、炭、土師器片少量
 65 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、土師器片少量
 66 10Y85/3にふい黄褐色砂泥(シルトっぽい)・・・地山

東壁断面



- 1 10Y83/2黒褐色砂泥、炭、焼土、漆喰含む、φ2~20cm礫含む
 2 10Y84/3にふい黄褐色砂泥、炭、焼土、土師器片含む
 3 10Y83/2黒褐色砂泥、炭、焼土少量、φ1~5cm礫少量
 4 5Y84/3にふい赤褐色粘土、瓦片含む
 5 10Y84/2灰黄褐色砂泥、炭、焼土、土師器片、瓦片含む、φ3~7cm礫多量
 6 2.5Y3/3暗褐色砂泥、炭、焼土少量
 7 5Y83/2黒褐色砂泥、炭含む
 8 2.5Y3/2黒褐色砂泥、炭少量(相互基準の混乱)
 9 10Y84/2灰黄褐色砂泥、炭、土師器片少量
 10 10Y83/2黒褐色砂泥、炭、焼土、土師器片、φ1~4cm礫少量
 11 10Y83/2黒褐色砂泥、炭、土師器片少量
 12 10Y82/3暗褐色砂泥、炭、土師器片少量
 13 10Y83/2黒褐色砂泥、炭少量
 14 10Y82/3暗褐色砂泥(炭層)
 15 7.5Y85/3にふい褐色砂泥(炭層)
 16 10Y84/4褐色砂泥、炭、土師器片含む
 17 2.5Y3/2黒褐色砂泥、炭、焼土少量
 18 10Y84/2灰黄褐色砂泥、炭、焼土、土師器片少量
 19 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、炭、土師器、焼土少量
 20 10Y83/2黒褐色砂泥、炭、土師器片、焼土少量含む
- 21 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥、炭、土師器、焼土少量
 22 10Y84/2灰黄褐色砂泥、炭少量、土師器片少量
 23 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、炭、土師器片少量
 24 10Y84/2灰黄褐色砂泥、炭少量、土師器片少量
 25 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、炭、土師器片少量
 26 10Y83/1黒褐色砂泥、炭、土師器片少量
 27 10Y83/2黒褐色砂泥、炭、土師器片少量、φ2~13cm礫多量
 28 10Y82/2黒褐色砂泥、炭、焼土、土師器片少量、φ2~12cm礫含む
 29 10Y82/3暗褐色砂泥、炭、土師器片少量、φ2~12cm礫含む
 30 10Y84/2暗褐色砂泥、炭、焼土少量、φ2~12cm礫多量
 31 2.5Y5/3黄褐色砂泥、炭、焼土、土師器片少量、φ3~10cm礫含む
 32 10Y84/2灰黄褐色砂泥、炭、焼土少量、φ4~10cm礫多量
 33 10Y85/4にふい黄褐色砂泥、炭、土師器、焼土少量、φ6~14cm礫多量
 34 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、炭、焼土少量
 35 2.5Y3/2黒褐色砂泥、炭、焼土、土師器含む
 36 2.5Y3/2黒褐色砂泥、炭、焼土、土師器、φ2~8cm礫含む
 37 10Y83/1黒褐色砂泥、炭、土師器片少量含む
 38 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、炭少量
- 39 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥、炭、焼土、土師器片少量
 40 10Y84/2灰黄褐色砂泥、炭、焼土、土師器片含む
 41 10Y83/2黒褐色砂泥、炭、焼土、土師器片少量
 42 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥、炭、焼土、土師器片少量
 43 2.5Y5/4黄褐色砂泥、炭、土師器少量
 44 2.5Y3/1黒褐色砂泥、炭多量、土師器少量
 45 2.5Y3/2黒褐色砂泥、炭、焼土、土師器片、φ2~10cm礫含む
 46 2.5Y3/2黒褐色砂泥、炭、焼土、土師器片少量
 47 10Y84/3にふい黄褐色砂泥、炭、土師器少量
 48 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥、炭、焼土少量
 49 10Y83/2暗褐色砂泥、炭、土師器少量
 50 2.5Y3/2暗オリーブ褐色砂泥、炭少量、φ2~11cm礫多量
 51 2.5Y3/2暗オリーブ褐色砂泥、炭少量、φ2~11cm礫多量
 52 2.5Y3/2暗褐色砂泥、炭、土師器少量、φ3~6cm礫多量
 53 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥、炭、土師器少量
 54 2.5Y4/4黄褐色砂泥、炭、焼土少量
 55 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥(地山)
 56 5Y84/4暗オリーブ褐色砂泥、土師器片含む(平安齋館)

図4 北壁・東壁断面実測図 (1/100)

土している。江戸時代前期に属する。

溝07 (図版1・3の2)

調査区南部に位置する。東西方向の溝状遺構である。幅1m、東西長7m、深さ0.6mを測る。埋土は焼土を多量に含む。室町時代後期に属する。

第2面 (図版1・4)

調査区の北西部を除き包含層を第2層として10~20cm掘り下げた。根石をもつ掘立柱、土取穴などを検出した。北西部においては江戸時代の堀状の落ち込みを検出した。

落ち込み362 (図版1・4の2)

調査区北西部に位置する。南北長3m弱、東西長2.5m以上、深さ1.6mを測る。東西方向の堀状の落ち込みである。西側が調査区外にのび、全形は不明である。江戸時代中期である。

石室227 (図版1・4の2・7の7)

調査区西部、落ち込み362の南東部1m程のところに位置する。遺構の南半部が試掘時に削平を受け、全形は知り得ない。10~30cm大の川原石を組み、7~8段残存する。内径0.6m、深さ0.8mを測る。掘形の東西幅1.7mを測る。石室内には何ら施設は認められない。江戸時代前期に属する。

塀01 (図5・図版1・4の2・7の8)

調査区西部、中央部南寄りに位置する。東西方向の塀跡である。4間分確認した。4間分の内、中2間は柱間1.3m間隔、外2間は柱間1mを測る。門戸に位置する部分であろうか。掘形は平面方形を呈し、0.7m程残存する。底部に根石を据える。当初平面形より中世以前のものと考えたが、江戸時代に属するものである。

掘立柱群 (図版1・4・7の4・8の4)

調査区北東部において柱穴群を第1面に続いて数多く現出した。柱穴191は径0.7mの円形の掘形に幅0.25m、長さ0.4m大の大きな根石を据え、大規模な建物の存在が想定されたが、これに対応する柱穴は残念ながら検出することができなかった。柱穴333・334・335は調査区南西部で検出した。いずれも柱底に根石を据える。室町時代後期に属する。

井戸168 (図版1・4の1)

調査区北東隅部に位置する。調査区の北壁部に掘形の一部が掛かり大半が調査区外になる。江戸時代に属する。

第3面 (図版2・5)

第3面は室町時代の土取跡が調査区全域でみられ、とくに中央部付近は顕著な土取跡が認められた。江戸時代の井戸十数基の開鑿と共に中世における土取跡の存在が、結果として、平安時代の遺構の大半が破壊された原因となっていることが判明した。この第3面においては土取穴・井戸跡などから破壊を免れた部分において多数の掘立柱跡を検出した。

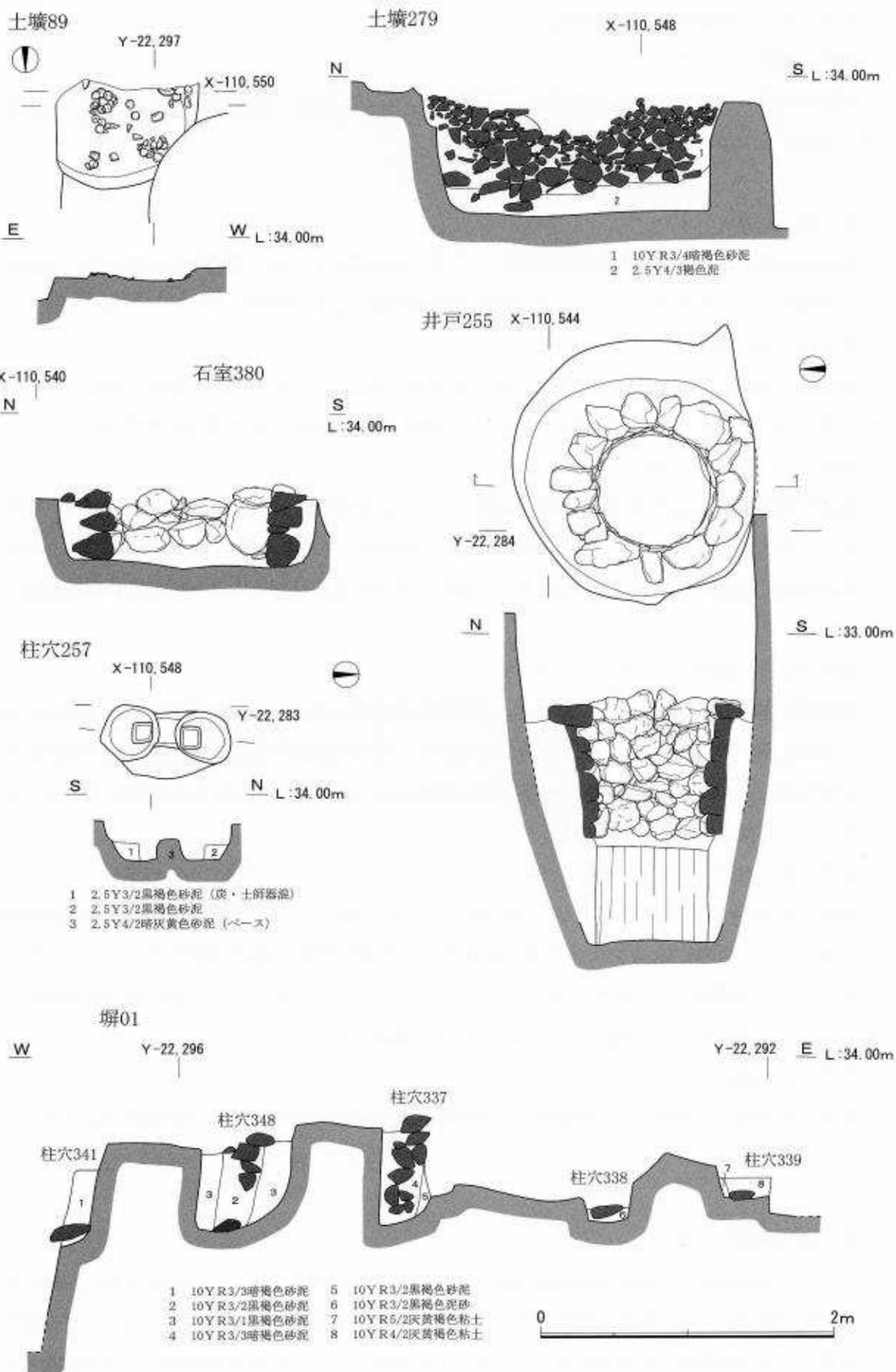


図5 土壌89・279、石室380、井戸255、柱穴257、塀01実測図 (1/40)

井戸255・235（図5・図版2・5の1・8の8）

調査区東壁近くの中央部南寄りに位置する。いずれも石組井戸である。井戸235と255は切り合い関係にある。当初2基の井戸の前後関係が不明であったが、1m程掘り下げた時点で井戸255が切り勝っていることが判明した。井戸255は20～40cm大の川原石を円形に組み、6段分程残存する。内径0.8mを測り、石組下部に径0.75m、深さ0.65m程の桶を据える。桶はほとんど腐り、痕跡のみ認められた。井戸235は調査区の東壁部に掛かり安全面から完掘することはできなかった。大半が井戸255に破壊されており、石組の推定内径1m弱で、20～30cmの川原石を組む。

石室380（図5・図版2・5の2・8の7）

調査区北西部に位置する。石組は三段程残存する。石はいずれも10～35cm大の川原石である。石室内の内径は、東西1.8m、南北1m程で、東西方向に長い。掘形は大部分が土取穴などで削平を受けている。石室内には特別な施設は認められなかった。

溝190（図版2・5の1）

調査区の北東部に位置する。幅1.8m、深さ0.6mの逆台形の掘形をもつ東西方向の溝状遺構である。東西長5m程確認したが、溝の西側は土取穴によって攪乱されており、東側は調査区外となる。溝底の堆積は顕著なシルトの堆積は認められず、水が流れた形跡も希薄であった。西二行の北二門と北三門の境界ライン上に位置する。

柱穴257（図5・図版2・5の1・7の5）

調査区東南隅部に位置する。双子柱穴である。径0.4mの掘形に0.15m角の柱を0.2mの間隔で立てている。両柱間は、地山が柱底より0.1m高く残存する。一見シーソーの支柱を思わせるような状況を呈する。平安京左京四条三坊五町跡の調査（註3）で同時代の全く同じものが出土している。

柱穴392・393・370（図版2・5の2・8の5と6）

調査区南西隅部に位置する。柱穴392は非常に立派な根石をもつ。径0.7mの掘形内に幅0.3m、長さ0.55mの根石を据える。その西側に接するように柱穴393がある。径0.65mの掘形に幅0.2m、長さ0.35mの根石を据える。この根石は拳大のぐり石によって補強している。柱穴370は径0.5mの掘形に幅0.2m、長さ0.3mの根石を据える。この3基の柱穴は当初掘形から平安時代中期の土師器皿が多量に出土したため平安時代中期のものと思われたが、断ち割りの結果、平安時代中期の土壌ないし整地層を切り込んで成立しており、それらの遺物が混入したことが判明した。いずれの柱穴も室町時代のものである。

掘立柱群（図版2・5）

調査区の東半部で多数の掘立柱跡を検出した。径0.3～0.4mの掘形をもつ比較的小さな掘立柱群である。第2面までの柱穴群と違い、根石をもつものはほとんど無い。鎌倉時代のものが大半で一部平安時代後期に遡るもの及び中期の遺物を包含するものがある。

土取穴163・164・181・182・246・280・281・284・306・378（図版2・5）

調査区全域にあるが、とくに中央部付近に集中する。方形を呈するもの（164・182・280）、円形を呈するもの（246・284・306）、不定形のもの（163・281・378）などがある。いずれも掘形はやや袋状を呈する。

第4面（図版2・6）

調査区全体が島状に地山が残存する状況を呈する。そのため土壌などの遺構の全形を確認することは不可能である。

柱穴297（図版2・7の6）

調査区北端部東寄りに位置する。東西長1.2mの掘形内に0.3～0.4m大の根石を据える。掘形の南部は土取穴によって削平を受けており、北側は調査区外となる。柱穴だとすると非常に大規模な建物跡が想定できる。鎌倉時代前期の遺物を包含する。

土壙279（図5・図版2・8の1～3）

調査区南東部に位置する。集石遺構である。第3面において検出したものであるが、他の遺構との切り合い関係上最終面で完掘した。東西幅1.3m、南北長2mの平面長方形の掘形をもつ。深さ0.8m程あり、掘形の壁面は直で、底部は平坦である。掘形の形状から木棺等を据えた可能性が考えられたが、木椀等の痕跡は認められなかった。掘形内は底部に幅0.2m程の礫を含まない砂泥層があり、その上に拳大から0.2m程の多量の円礫が堆積する。礫の堆積は上半部に小さいものが多く、下になるほど礫が大きくなる。多量の礫が落ち込んだ状況を呈する。

IV 遺物

出土遺物は整理箱にして149箱ある。時代は平安時代中期から江戸時代までのものがあり、大半が室町時代の土取穴、江戸時代の井戸等に伴うものである。遺物の種類には土師器、須恵器、瓦器、国産陶磁器、輸入陶磁器、瓦、金属製品、石製品、土製品、銭貨などがある。以下主要な遺物について概述する。なお、時代区分は平安京の土器編年（註4）をもとにおこなう。

土器・陶磁器類

井戸235出土土器（図6・図版9）

土師器（1～25）、焼き締め陶器（26）、瓦器（27）、青磁などがある。土師器皿2～5・7～9・11～25、陶器26・瓦器27は上層より出土、土師器皿6・10が石組内出土である。土師器皿には白色系の皿Sh（1～5）、皿S（6～15）と赤色系の皿N（16～25）がある。26は備前系の甕の口縁部である。径2cm程の小さな玉縁をもつ。胎土はセピア色を呈し、白色粒を多く含む。27は瓦器鍋である。口縁部外面指押さえ痕が顕著に認められる。IX期に属する。

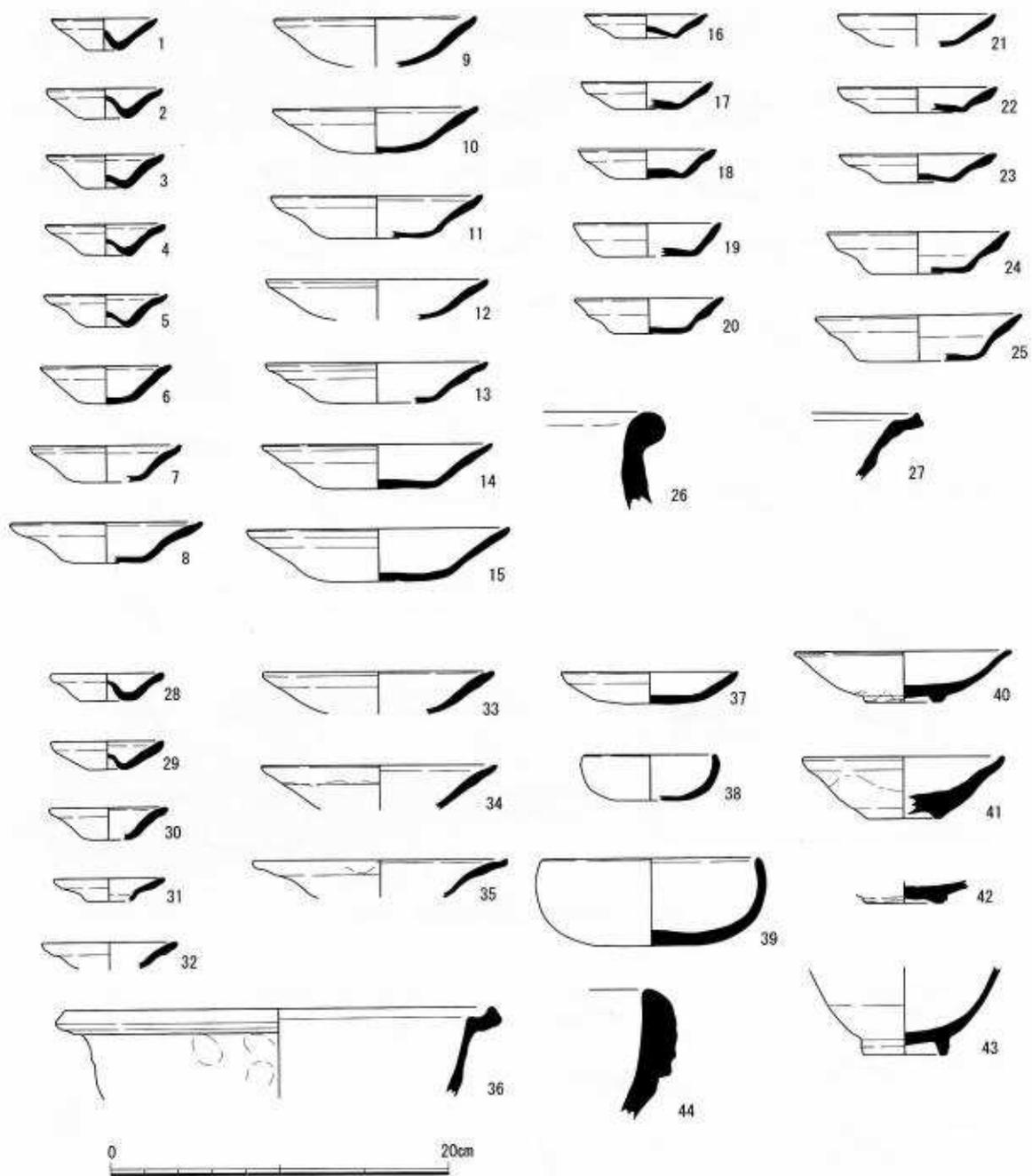


图6 井戸235 (1~27)、井戸59 (28~36)、井戸255 (37~44) 出土遺物実測図 (1/4)

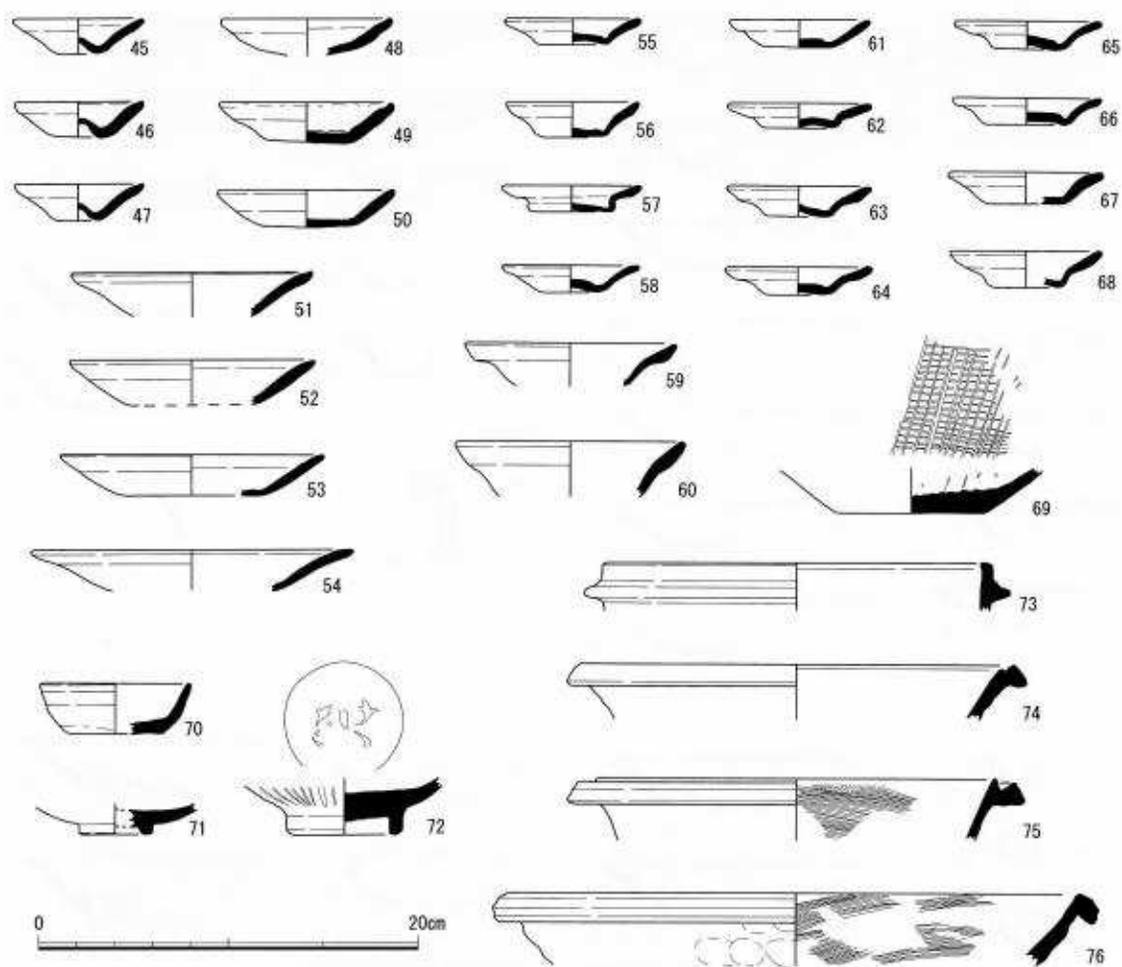


图7 溝190出土遺物実測図 (1/4)

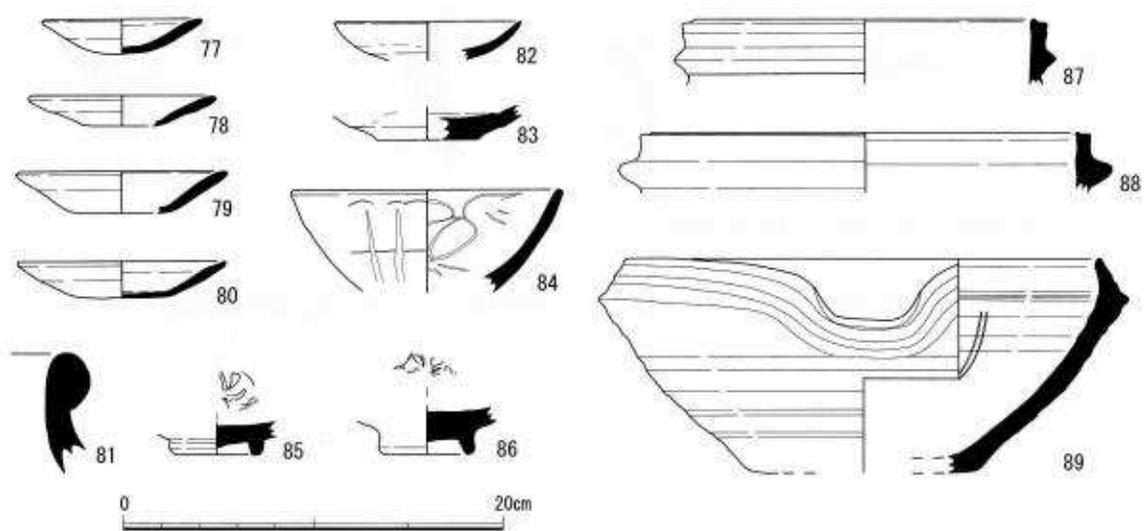


图8 土壙279出土遺物実測図 (1/4)

井戸59出土土器 (図6)

土師器 (28~35)、瓦器 (36) がある。土師器皿28・32・35は上層、土師器皿29~31・33・34、瓦器鍋36は下層出土である。土師器皿には皿Sh (28~30)、皿S (33~35) と皿N (31・32) がある。瓦器鍋36は体部内面板ナデ、外面押さえのまま不調整である。長石粒を多く含む耐火土である。図化した以外には輸入青磁碗、小さな玉縁をもつ白磁碗、常滑系の甕、瓦器火鉢片などがある。X期に属する。

井戸255出土土器 (図6・図版9)

土師器 (37~39)、施釉陶器 (40~43)、焼き締め陶器 (44) がある。土師器には皿N (37) と鉢 (38・39) がある。鉢はいずれも白色系である。38は口径7.7cm、器高2.7cm、内外面平滑に仕上げる。39は口径12.7cm、器高5.2cmを測る。体部内面弱いナデ調整をおこなう。体部外面は指押さえ痕が残る。内面は二次焼成を受け素地が黒化する。外面も一部に煤が付着し、赤変する。40~42はいずれも唐津系皿である。41は胎土目、40・42は砂目である。43は伊万里系白磁碗である。高台内径4.3cmを測る。口縁端部内外及び体部外面に釉溜まりがみられる。44は備前系の甕である。口縁部外面肥厚部下半に4条の凹凸を付ける。以上の内、40・44が石組内出土、それ以外は上層出土である。XI期古~中に属する。

溝190出土土器 (図7・図版9・10)

土師器 (45~68)、施釉陶器 (69)、瓦器 (73~76)、白磁 (70・71)、青磁 (72)、焼き締め陶器などがある。土師器皿には白色系の皿Sh (45~47)、皿S (48~54) と赤色系の皿N (55~68) がある。皿Nは口径が9cm前後のものと、12~18cm大のものがある。49はほぼ完形品で、底部内面には一定方向のナデが認められる。口縁端部の全周に煤が付着する。皿Nの小さいものの中には強い横ナデによって底部内面が円盤状に盛り上がるもの (58・59・62~64) がある。69は瀬戸系のおろし目皿である。底部外面は糸切りのままである。胎土は灰色を呈し緻密、内外面の一部に灰釉が認められ、外面には焼きムラがある。70はいわゆる口禿と呼ばれる白磁皿である。口縁端部及び体部外面下半以下は釉葉なし。底部外面は平滑に削る。胎土は灰白色で、釉はやや青みを帯びる。白磁碗71は削り出しの輪高台をもつ。釉は浸け掛けし、体部下半及び高台部に無釉部分がある。胎土、釉ともに白色を呈する。72は龍泉窯系の青磁碗である。体部外面に鑄連弁文を施し、見込みに印刻花文を施す。高台内の底部外面は蛇の目ふうに釉を掻き取る。胎土は青みを帯びた灰白色、濃緑色の釉を厚く施す。瓦器の羽釜73の内面はナデ調整。鏝の接着部が顕著に認められる。瓦器鍋74~76は体部内面ヨコ方向の板ナデ調整を施す。76の口縁部は受部がほとんど形成されていない。45~47・49~51・54・55・57~59・62~64・67・68が上層出土、48・60・65・69・71が中層、52・56・61・70・73~76が下層、53・66・72が最下層出土である。IX期に属する。

土壙279出土土器 (図8・図版10)

土師器 (77~80)、焼き締め系陶器 (81・89)、白磁 (82・83)、青磁 (84~86)、瓦器 (87・88) などがある。土師器皿77~80は白色系の皿Sで、口径8.0~10.8cmを測る。81は備前系の甕で

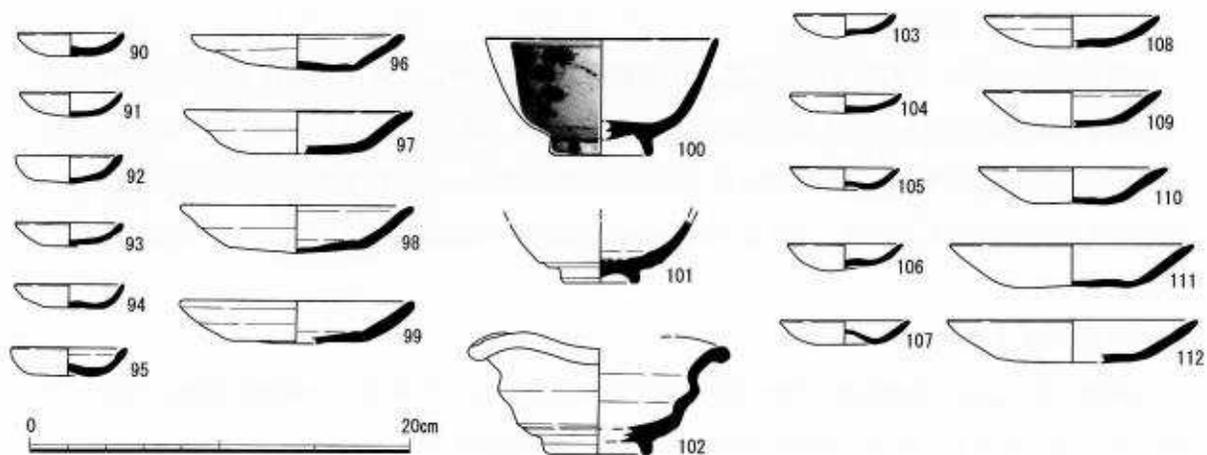


图9 土城89 (90~102)、石室380 (103~112) 出土遺物実測図 (1/4)

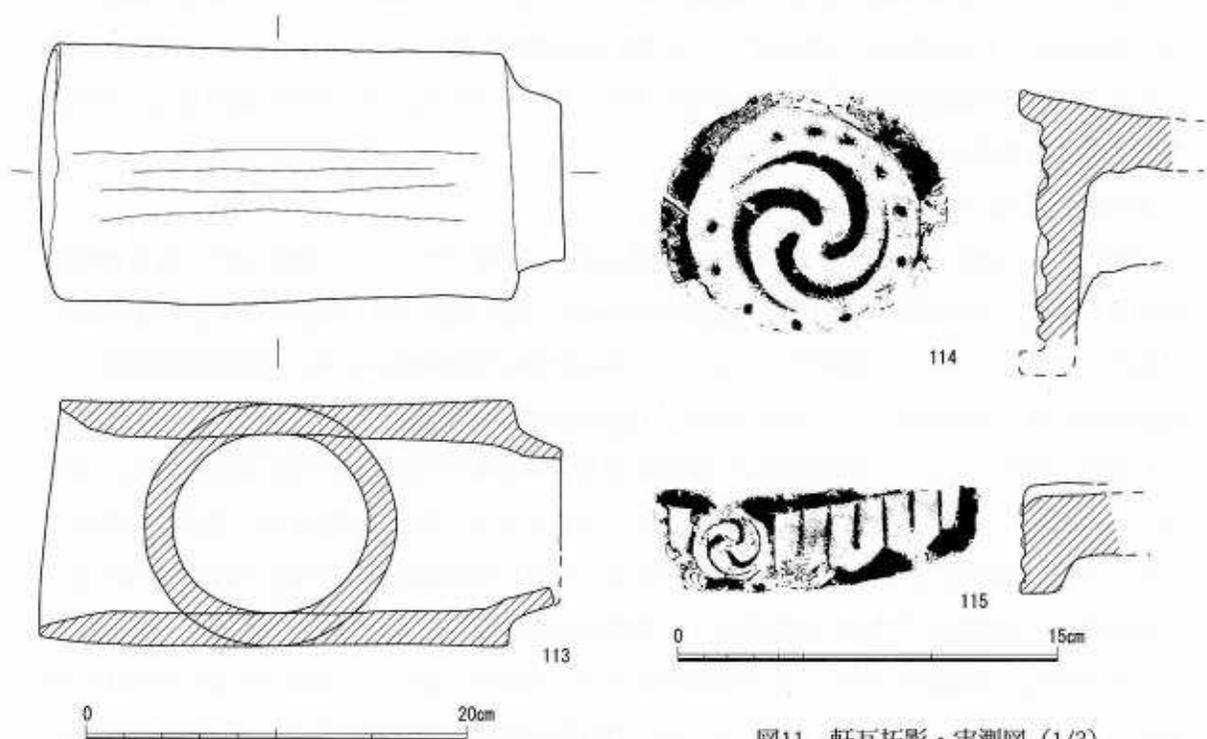


图10 井戸255出土瓦実測図 (1/4)

图11 軒瓦拓影・実測図 (1/3)

ある。口縁部は端部を外側に折り返し、幅2cm、高さ3cmの玉縁状に作る。胎土は白色粒を多く含み粗く灰色、表面はやや褐色を帯びる暗灰色を呈する。82は白磁皿である。高台部を欠く。おそらく輪高台。釉は浸け掛けし、体部外面下半以下釉は無し。胎土は白色、釉はやや青みがかかる白色である。83は白磁碗である。底部は体部下半の釉を削り取り、削り出しふうに作る平高台である。胎土・釉ともに灰白色を呈する。84・86は青磁碗である。84は体部外面に蓮弁文、内面に劃花文を施す。86は見込みに印刻花文を施し、内外面とも釉に貫入が認められる。いずれも胎土は青みがかかる灰白色、釉は濃緑色で厚い。龍泉窯系である。87・88は瓦器の羽釜である。それぞれ口径17.8cm、22.2cmを測る。口縁部内面はヨコ方向のナデ調整を施す。89は備前系の播鉢である。体部内面に10cm間隔で数条の櫛目を施す。内面はきわめて平滑である。胎土は赤橙色を呈し、白色粒を多く含む。77・79～81・84・88が上層出土、78・82・83・85～87・89が下層出土である。X期に属する。

土壙89出土土器（図9・図版10）

土師器（90～99）、施釉陶器（101・102）、染付磁器（100）がある。土師器には赤色系の皿Nr（90～95）と白色系の皿Sがある。皿Nrの口径は5.4～6cm、器高1.2～1.4cmを測る。いずれも完存品である。皿Sは口径11.0～12.2cm、器高2.1～2.5cmを測る。97は内面凹線きわめて浅い。100は染付磁器碗である。外面に松を描く。内外面貫入が認められる。101は唐津系碗である。外面体部下半は無釉である。102は唐津系鉄絵碗である。XI期に属する。

石室380出土土器（図9）

土師器、瓦器、施釉系陶器、染付、青磁、白磁片などがある。ここでは図化できた土師器皿を報告する。土師器皿には赤色系の皿Nr（103～107）と白色系の皿S（108～112）がある。皿Nrは口径5.3～6.8cm程、皿Sの口径は9.2～13.2cm大を測る。107～109・112は石室内下層、103～106・110・111は掘形出土である。XI期古に属する。

瓦類

筒型丸瓦（113）（図10・図版10）

井戸255の石組内上層より出土。土管ふうに作る。ほぼ完存品である。

三巴文軒丸瓦（114）（図11・図版10）

柱穴297上層より出土。右巻きの三巴文に14個の珠文を配す。胎土は砂粒を含み粗い、焼成は良く、暗灰色を呈する。二次焼成を受けて全体に赤変する。

剣頭文軒平瓦（115）（図11・図版10）

石室380の石室内より出土。中央に三巴文を配し、左右に剣頭文を三个体ずつ配す。瓦当部上端及び顎部はヨコ方向の削り、顎部裏面はヨコナデをおこなう。胎土は白色砂粒を多く含み粗い、焼成は良好で三巴文軒丸瓦と同様二次焼成を受け、赤変する。

V 小 結

今回の調査においては、平安時代後期から江戸時代の遺構群を多数検出することができた。中でも室町時代の掘立柱跡、井戸、集石遺構、石室などが良好な状態で遺存していることが判明した。しかしながら、江戸時代以降の井戸と室町時代後期以降の土取穴によってそれ以前の遺構の多くが破壊削平を受けていた。とくに、調査面積230㎡の狭小な範囲に江戸時代の井戸が18基も開鑿されており、今までの左京域の調査例からは倍近い数量であり、きわめて特異な状況であるといえる。室町時代以降、四条室町から西洞院にかけてのこの辺りは左京の中心地付近に位置し、江戸時代にかけては町屋がひしめき合っていたことが容易に想像できる井戸の数でもある。また、調査当初においては、「四条宮」の遺構の存在が期待されたが、多数の井戸と土取穴によって平安時代の遺構はほとんどが削平されていることが判明し、一部当該期の遺物が検出されたのみで、残念ながら四条宮の建物遺構などを知ることはできなかった。

本調査地においては、現地表下1m足らずで黄褐色砂泥層（いわゆる聚楽土）の地山が現出する。当該地は弥生時代から古墳時代の集落跡・烏丸綾小路遺跡に含まれるところでもあり、それらの集落の立地が鴨川の扇状地の微高地部分あるいは自然堤防上に位置することは以前より周知されていたところである。しかし、現地表下0.7~0.8mで室町時代の遺構面が現出し、古代よりほとんど地表面の標高が不変であることが判明した。それは今までの四条通り沿いの調査・東は高倉通りより、西は西洞院通り間においては同様な標高で地山が検出されていることが分かっている。従来より平安京の左京域は千年にわたり連綿と続いた人々の生活によって、2m以上生活面が上がったと一般的に良く言われ理解もされてきたが、実際今回の調査の示唆するところは、左京において2m以上土層が堆積する地域、言い換えれば現地表面より2m以下で平安時代の遺構が検出される地点は、鴨川扇状地の中の低位部あるいは後背湿地に相当するところであることを強く示唆するものである。鴨川の氾濫と度重なる京中に生じた火災などによって扇状地の低位部や後背湿地に相当する地域が、千年もの間に、氾濫砂礫層や戦乱・大火により焼け落ちた壁土などが少しずつ積み重ね整地されてきた結果、現在みられる左京域における土層の厚い堆積層を生み出しているものと考えられる。逆に言えば、現代の緩やかな高低差をもつ左京域の地形は、平安時代においてはより凹凸のある地形であった可能性が高く、今までの調査事例の再検証によって新たな平安京左京の地理的変遷が明らかになるものと考えられる。

- 註1 角川日本地名辞典 26京都府 角川書店 1991年
日本歴史地名体系27 京都市の地名 平凡社 1979年
山田邦和 「左京と右京」『平安京提要』（財）古代学協会・古代学研究所 1994年
- 註2 辻 純一 「平安京の条坊復原」『京都府埋蔵文化財情報 第27号』
(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988年
- 註3 『平安京左京四条三坊五町 一菊水鉾町の調査一』 古代文化調査会 2008年
- 註4 小森俊寛・上村憲章 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年」『研究紀要第3号』
(財) 京都市埋蔵文化財研究所 1996年

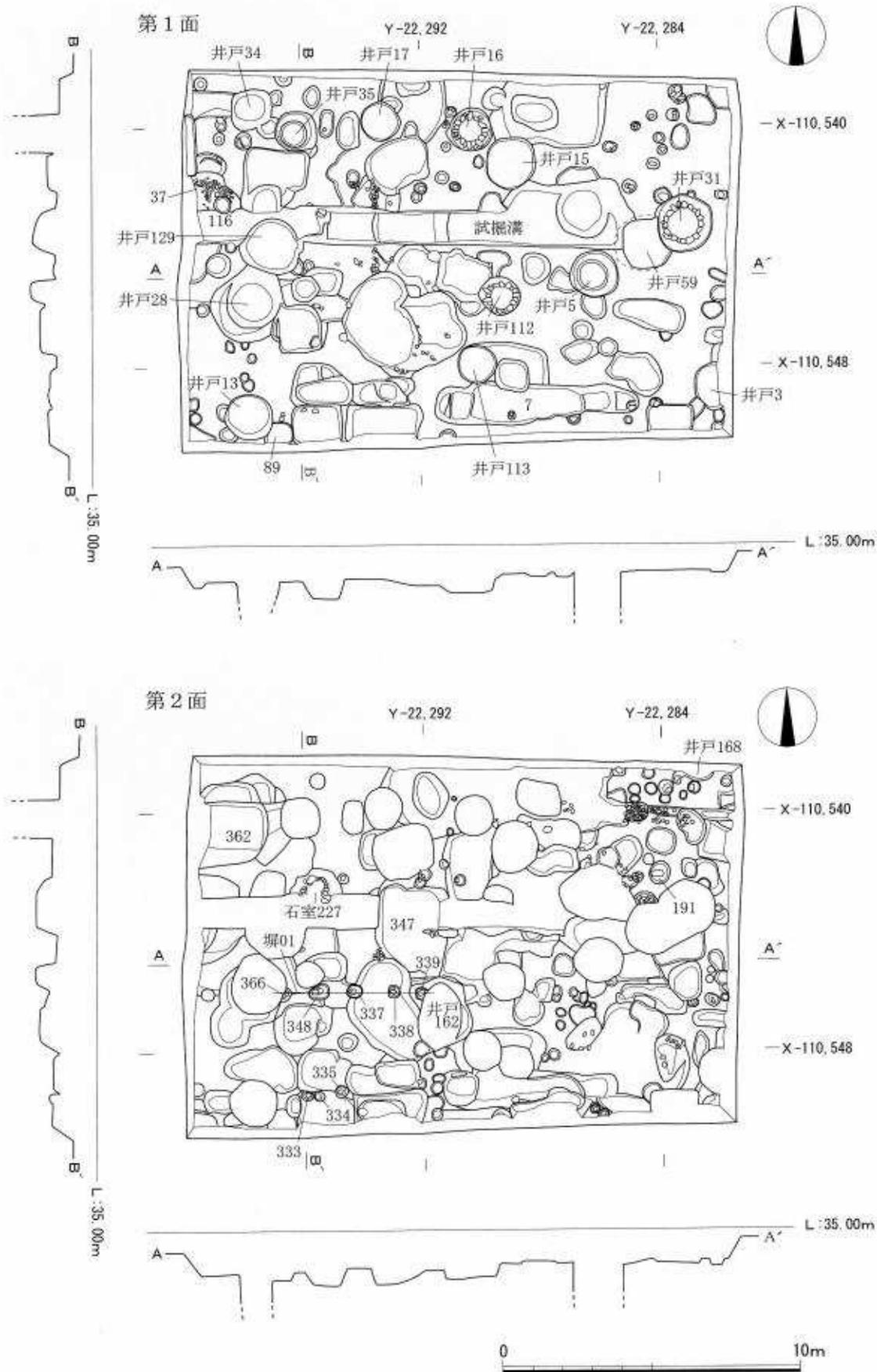
ここで扱う各期の年代は、Ⅵ期（1180～1270年頃）、Ⅶ期（1270～1360年頃）、Ⅷ期（1360～1440年頃）、Ⅸ期（1440～1500年頃）、Ⅹ期（1500～1580年頃）、Ⅺ期（1580～1660年頃）、Ⅻ期（1660～1740年頃）である。なお各期は基本的に古・中・新の3型式に細分される。

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうごじょうさんぼういっちょう							
書名	平安京左京五条三坊一町							
副書名	四条西洞院の調査							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	家崎孝治 水谷明子							
編集機関	古代文化調査会							
所在地	〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地125-1404							
発行年月日	2008年7月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょう 平安京左京 ごじょうさんぼう 五条三坊 いっちょう いっちょう からすまあやのこうじ 烏丸綾小路 いせま 遺跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 あやのこうじごわいにしのどう 綾小路通西洞 院東入 いんひがしいる 新釜座町	26100		35度 00分 11秒	135度 45分 21秒	20080115 ～ 20080311	231㎡	ホテル建設
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
平安京左京 五条三坊 一町 烏丸綾小路 遺跡	都城跡 集落跡	鎌倉時代 室町時代		掘立柱 土城、石室、 井戸、溝、 掘立柱		土師器、瓦 土師器、瓦器 国産陶磁器 輸入陶磁器		江戸時代の井 戸多数 中世の土取穴 多数

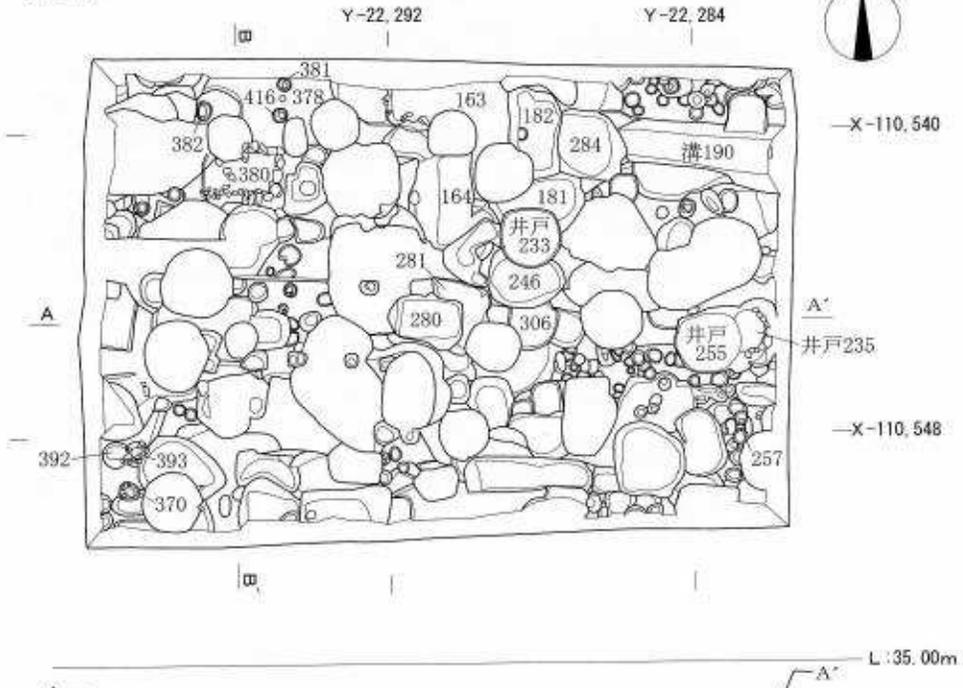
版 圖



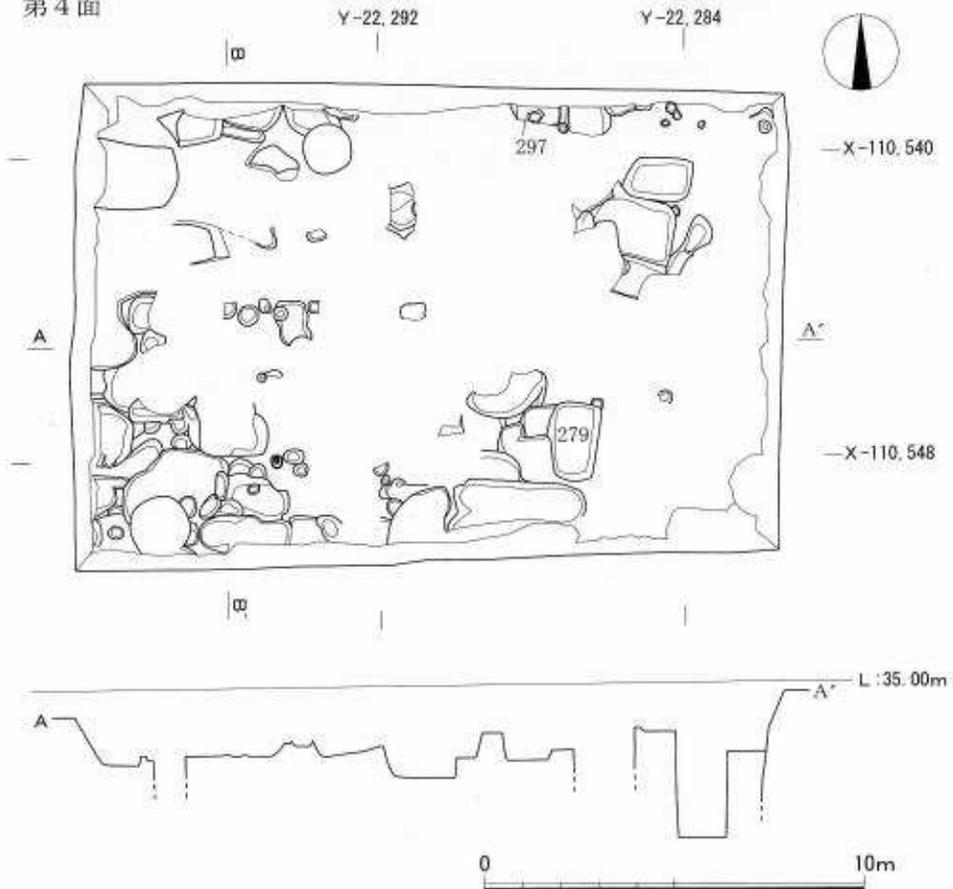


第1・2面遺構実測図 (1/200)

第3面



第4面



第3・4面遺構実測図 (1/200)



1 調査地遠景（北西から）



2 第1面全景（北西から）



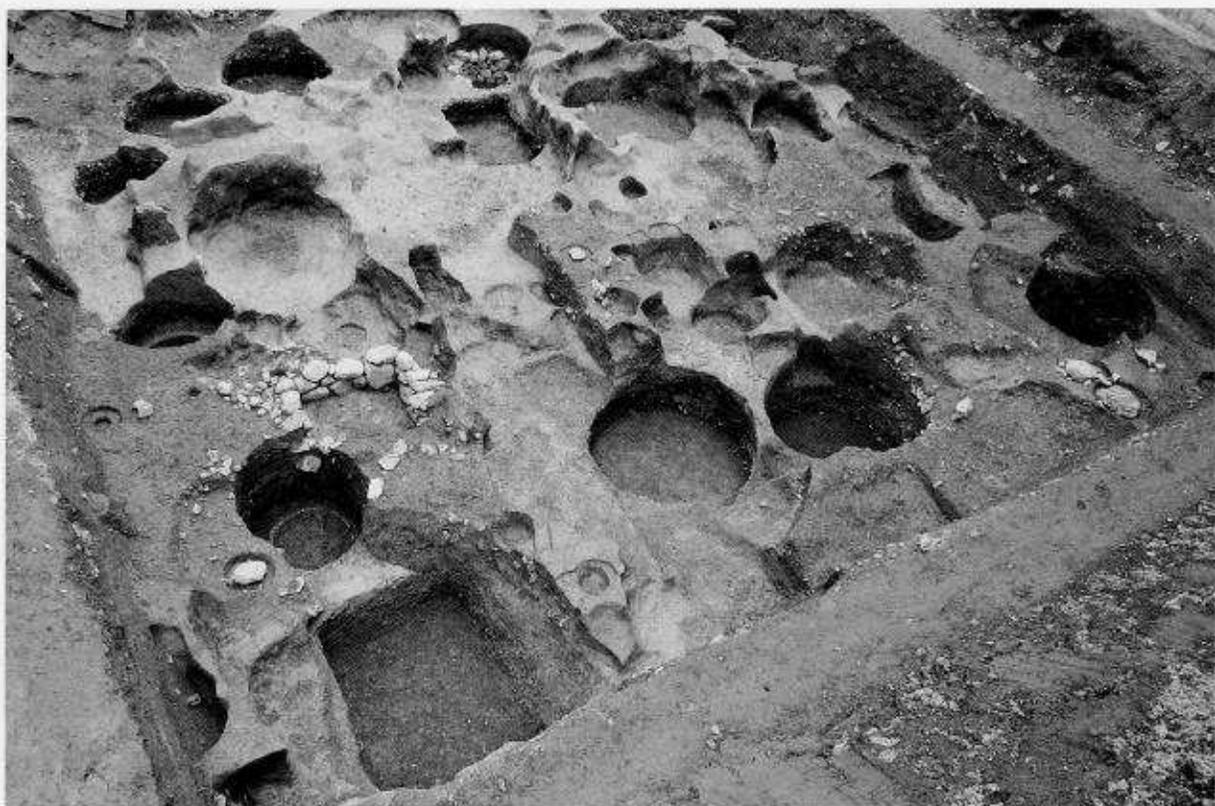
1 第2面東半部全景（北西から）



2 第2面西半部全景（北西から）



1 第3面東半部全景（北西から）



2 第3面西半部全景（北西から）



1 第4面西半部全景（北西から）



2 第4面東半南部（南東から）



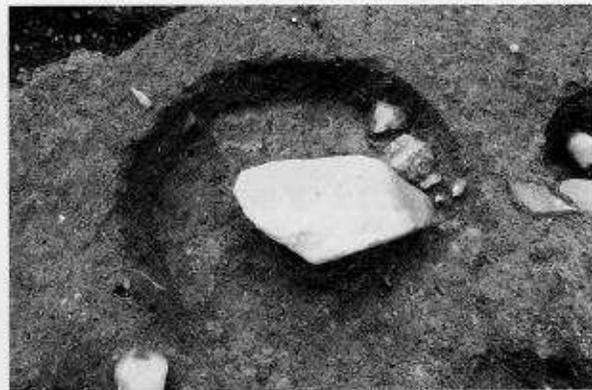
1 庭園遺構116 (西から)



2 第1面北東部柱穴群 (北から)



3 土城89土器出土状況 (西から)



4 柱穴191 (北から)



5 柱穴257 (西から)



6 柱穴297 (南から)



7 石室227 (南から)



8 柱穴348 (南から)



1 土城279 (北東から)



2 土城279断ち割り断面 (西から)



3 土城279完掘状況 (東から)



4 柱穴333・334・335 (南から)



5 柱穴392・393 (南から)



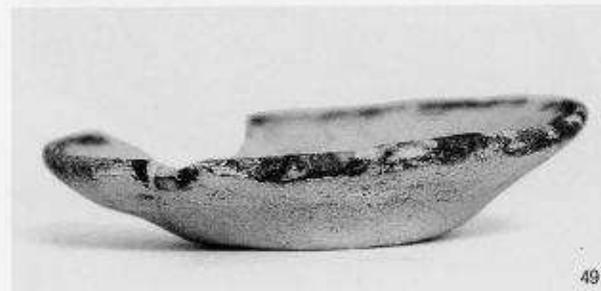
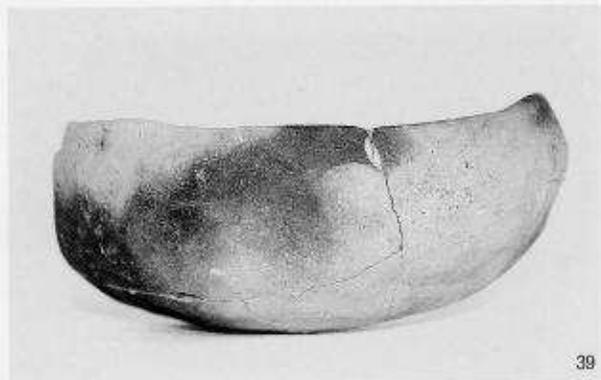
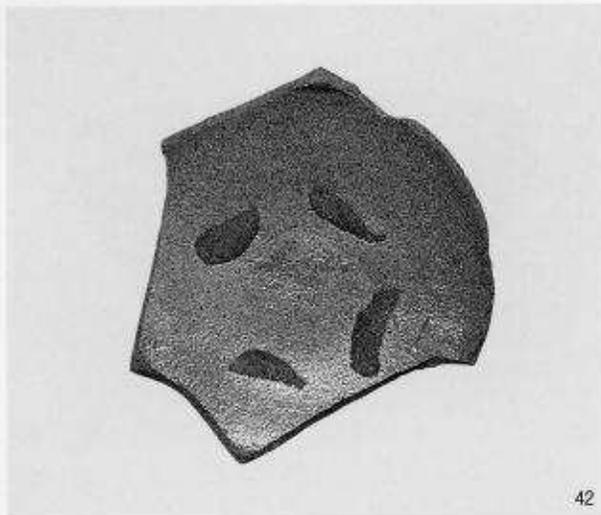
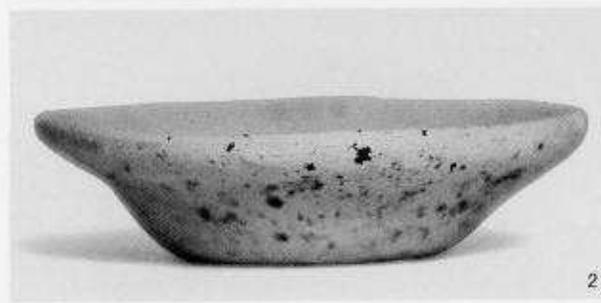
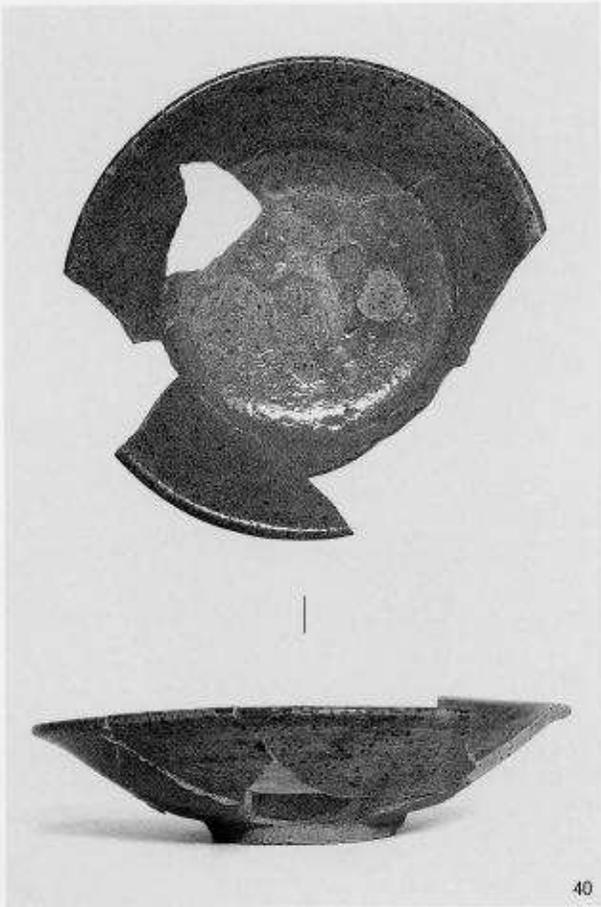
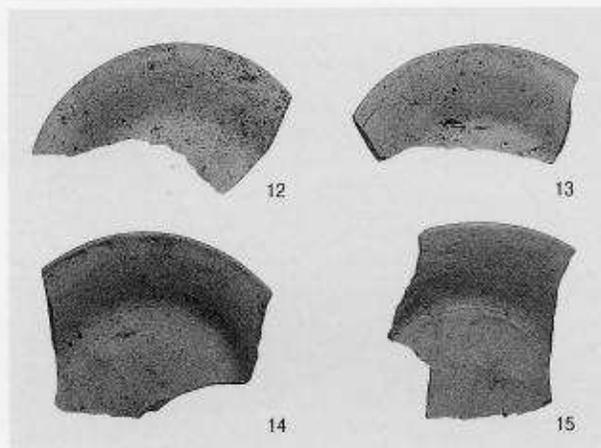
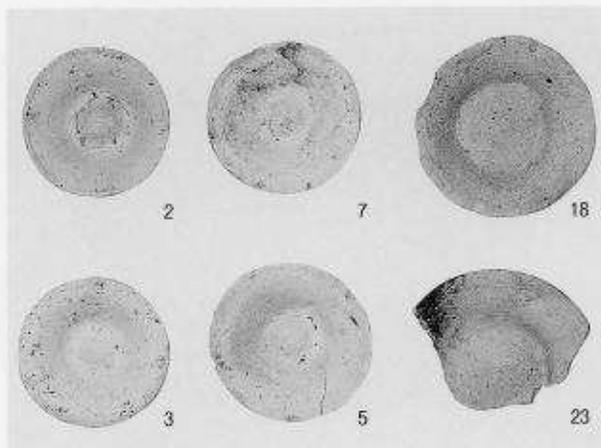
6 柱穴370 (南から)



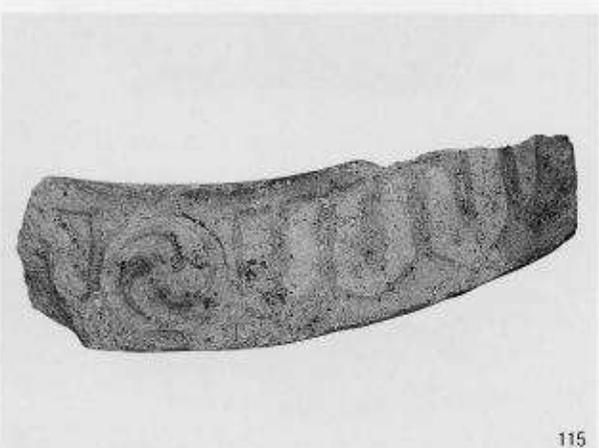
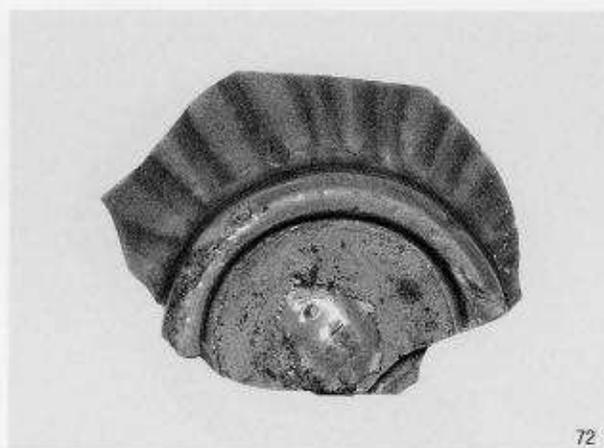
7 石室380 (北西から)



8 井戸255 (西から)



井戸235 (2・3・5・7・12~15・18・23)・井戸255 (39・40・42)・溝190 (49) 出土遺物



溝190 (72)・土壙279 (84・89)・土壙89 (100・101)・井戸255 (113)・柱穴297 (114)・石室380 (115)
出土遺物

平安京左京五条三坊一町

—四条西洞院の調査—

発行日 2008年7月31日

編集行 古代文化調査会

住所 〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1-4-125-1404
TEL (078)857-6368

印刷 真陽社
〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL (075)351-6034

